

今よりもっと笑えるように

石川雅晴

(保育士)

子どもとかわる仕事って面白そう！そ

んな気持ちで足を踏み入れた保育の世界。人格形成の基礎となる時期を共に過ごす保育者の役割の大きさと、子どもの持つ力にひかれ、この仕事に魅力を感じています。子どもにとって何が大切か、自分にできること、これからの役割など考え続けています。十三年間たぐさんの親子とかわり、その中で信念も確立してきました。保育の楽しさと難しさを感じ始めています。まだ不完全ではありますが一度整理したいと思います。

子どもと歩む保育

以前は子どもと対等にぶつかっていました。決めた枠の中に押し込めようと、外れる子に怒ったり力で押さえこんだりしていました。その場は言うことを聞くように見えるが、これだけのだろうか？ 自分の「させる」保育に疑問を抱き悩む中、ある子との出会いが保育観を変えるきっかけになったのです。

〈Aちゃんとの出会い〉

クラスから外れる、外に飛び出していく、

石川雅晴（いしかわ まさはる）
第二府中ひかり保育園（広島県安芸郡府中町）保育士。
比治山大学幼児教育科卒業。二児の父。広島県内の男性
幼稚園教諭、保育士がメンバーの子育て応援ロックバンド「大丸ロケッツ」としても活動中。

友達のキーホルダーを欲しがりハサミで切る……さまざまな注意獲得行動を見せていたAちゃん。言葉で注意しても叱ってもまったく変わらなず、かわり方がわかりませんでした。何かモヤモヤを抱いているのでは？ その感じ、当園のスーパーバイザーであり、私の大学時代の恩師でもある臨床心理の先生に相談することになりました。『優しさ不足』という見立てのもと、優しさを注ぐ・特別扱いをする個別対応を行うことになりました。今までの叱って正そうとする考えや「みんな平等に」という考えとは真逆の発想で、行動の裏に込められた思いに初めて目を向けた瞬間でした。「特別扱い」に戸惑いはありましたが、園庭に逃げるAちゃんは、追いかけること自体を喜んでいるようでした。『捕まえて連れ戻そう』という考えではその表情に気づけなかったでしょう。しばらくつき合えば、「帰ろう」

と声をかけると、素直にクラスに戻るのです。六月の運動会では人前に出られなかったのが、十一月の発表会では自信を持って演技できるようになる。クラス活動に取り組めるようになる。友達に手をささなくなり、保育者に泣いて訴えるようになる等、優しさを注ぐかわりに変え、継続することで、たくさんの変化が見られました。困らせる存在から、かわいいと思えるようになり、私自身も穏やかになっていくことに気づきました。満たされたことにより自律（自分を律する力）につながったこともわかりました。

Aちゃんとのやりとりから、心が満たされていらない子に対して「させる」かわりでは、表面的に正すだけで、より良い姿になる方法ではないことがわかりました。家庭環境を理解した上で、行動の裏にはどんな意味があり、その子にとって何のメリットがあるかに目を

向ける。かかわりの方向性を決め、「心理治療的アプローチ」を用いた個別対応をしていく。「子どもと歩む保育」が私の目標となりました。その考えは、行事や活動を子どもとつくり進めていく姿勢にも反映されるようになり、私の「保育のベース」となっていました。

親子と歩む保育

私も二児の父となり、わが子への悩みから、親としての苦労が少しずつ見え始め、園児とだけでなく保護者とも取り組むことがプラスになっていくのではと思い始めました。しかし一方で、「子どもにとって大切なことに気づいてほしい」という思いが先行して、懇談やお便りで「こうかわるのがよい」と言い続けるばかりでした。反応は薄く、親子の支えになれていない——そんな感覚でした。そんな折、わが子について妻と話しあったことがあります。私の言うことは正論で間違っていない。

ない。子どもにとって前向きな言葉掛けがよいこともわかる。でも、常に一緒にいると、感情的になるし、うまくいかない子育てに不安になることだってある……妻の本音を聞き、園の保護者も同じように感じていたのではありませんでした。子どもにとって良いであろうことはわかっていても、子どもの一番近くにいる親の気持ちに気づいていなかったのです。

〈K君親子との出会い〉

気持ちを抑えられなくなるK君は、クラスで友達との衝突が絶えませんでした。様子を伝えると、家庭でも困っていること、実は母親も悩んでいることがわかりました。

母親の気持ちに目を向けようと思い、話を聞く場面を継続してつくることにしました。すると、なかなか聞けなかった本音や、わが子への思いを少しずつ話されるようになり、共に専門機関に相談するきっかけができました。

た。お願いやアドバイスばかりではなく本音を語れる関係をつくる大切さに気づいたので。「わが子への思いを話せる場がある」「共に考え、進んでくれる人がそばにいる」という安心感を持つことが子どもにもプラスになることを、K君親子から学びました。それぞれの家庭が抱く悩みに向きあい支える「親子と歩む保育」が次なる目標となっていました。

最後に

「子どもと歩む保育」…この子が何か気になる、で終わりにせず、行動にどんな意味があるか気づく姿勢が必要だと感じます。クラスをまとめていくばかりではなく、気になる子へは個別対応をするなど、全体と個別のかかわりを使い分ける工夫をした保育をする。

「親子と歩む保育」…保護者の言葉に耳を傾け、子どもの成長発達に向けて共に考え、進

んでいく姿勢と専門性をさらに身につける。

どちらの目標もレベルアップが必要です。個別対応の記録をまとめて自分の引き出しの数を増やすとともに、他の保育者が書いた記録も数多く読んでいく。子どもが本来持っている個性に家庭環境がどのように影響しているのか、発達の遅れはないかなど、専門的な知識・視点を増やすためにさまざまな分野の研究や取り組みに触れていく。そして自分の考えを文章としてまとめて表現・発信していく。日々の保育を充実させるために、これらのことに取り組んでいきたいと思えます。

今まで、心にモヤモヤを抱え、なかなか笑顔になれない子どもたちと出会ってきました。しかし、私とのかかわりの中で見せてくれた笑顔が私の支えとなっています。たくさん親子が今よりもっと笑えるように、共に歩む保育を続けていきたいと思えます。